

都市環境デザイン会議

東京都渋谷区広尾1-10-4
越山LKビル内150TELEPHONE 03-5420-5995
FACSIMILE 03-5420-5996

JUDI NEWS

013 AUGUST 20.
1993発行者
都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

●第3期定例総会開かる	1	5. 「士幌線跡地、火防線 —— 住民主体の景観デザイン」	6
●特集／帯広のグランドデザイン		●プロック活動予定	
1. 都市変革のプロジェクトに挑戦する	2	東北プロックより	7
2. 大改造進む帯広都心部	2	北海道プロック活動予定	7
3. 新産業ゾーン開発：十勝の自然と 調和する未来型産業地域形成	4	●お知らせ	
4. 帯広の大緑地構想	5	事務局より	8
		編集後記	8

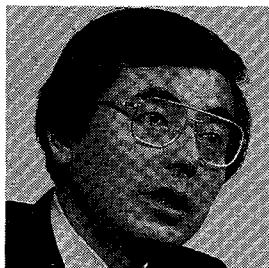
第3期定例総会開かる

加藤 源

GEN KATO

代表幹事

日本都市総合研究所



都市環境デザインに関する社会的発言を

■ 去る7月23日（金）午前11時から東京湾岸に開発が進む天王洲アイル地区のM Iビルにおいて、約50名（委任状も含めて208名）の会員の出席を得て第3期定例総会が開催された。午後には、事業委員会の尽力もあり、昨年の臨時総会時に続いて都市環境デザインモニター・メッセが24の企業の参加、また行政機関等からの多数の招待モニターの参加を得て盛大に開催され、いずれも成功裡に終わった。

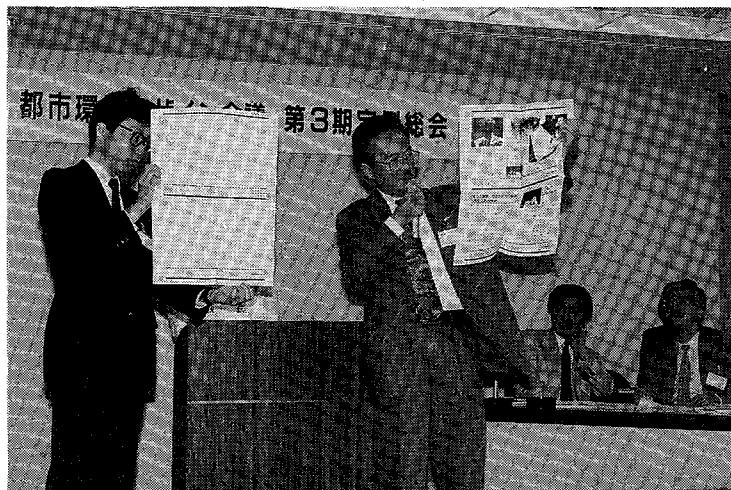
■ 総会の第1号議案として、第2期活動報告及び収支決算が上程され、加藤代表幹事、各委員会委員長（西沢事業委員長、土田広報委員長、窪田研修・研究委員長代理）及びプロック幹事代表（森延彦中部プロック幹事）から議案の説明があり、賛成多数で承認された。

また第2号議案として、第3期活動計画及び予算計画が上程され、これも承認されたが、開会挨拶に立った高橋志保彦代表幹事の言葉にもあったように、本会の活動が始動から加速の時期を迎えつつあり、また各界から暑いみなぎしが向けられているとの認識から、特に第3期活動計画として、新たに都市環境デザインに関する社会的発言をしていくことが加えられた。

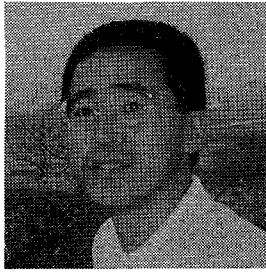
■ その他の今期の活動方針としては、先期に引き続きプロック活動の活発化並びに異なった専門分野の会員相互間の情報交換、相互研修が決められた。プロック活動は相当活発化しているものの、今後に期待されるプロックも多く、今期はこれらのプロックにおいて積極的な活動の展開を期待することとした。

■ また、本会の会員数は発足時の約120人から本年5月末（第2期末）現在で369名に達し、その後も増え続けているとの報告があったが、活動が活発化するにつれ、今期の予算計画にも見られるように財政状況には相当苦しいものがあり、財政基盤の充実が今後の課題の一つとして挙げられた。事業収入の増加、協力会費の納入増等がその具体策となると考えられる。

■ 総会後の自由討議では、関東プロックの総意として同プロックを代表して伊藤洋関東プロック幹事から、会員相互の交流や情報交換等を目的として、会員のプロフィール・ブックを今期に出版する件について提案があり、各プロックの幹事から賛同が得られた。費用面や名簿との関係等なお検討する課題が多いが、代表幹事会並びに各プロックからの支援、また会員個々からの円滑な原稿提供等が期待されるところである。



富岡 浩二
KOJI TOMIOKA
風土と建築を考える会
帯広市役所



都市変革のプロジェクトに挑戦する —— 帯広のグランドデザイン

東北海道の魅力

小都市自立型の地域。人口や経済の集積密度は低いが、情報と交通がネットワークし、生活や企業の営みが完結する。これが東北海道の将来像です。何といっても東北海道の魅力は帯広の農村景観、釧路の湿原、北見のソーラーなど「地球環境時代」に合った日本のどこにもないイメージがあり、知的生産拠点の回廊になり得る唯一の場所であると思われる点にあります。特に、帯広・十勝はそこそこ豊かな生活と自信が垣間見られ、独立王国の雰囲気を持ち始めています。1993年2月北海道で初めて帯広圏が「地方拠点都市」の指定を受けた理由もここにあるかもしれません。そもそも西北北海道と東北海道は違う大陸からなり、それがぶつかり褶曲されたのが日高山脈です。よって気候も違います。札幌は山陰地方であり、帯広は山陽地方です。「太陽・土・小都市自立」がこの地方のデザイン条件になります。

地域の環境構造

約1万平方キロメートルで秋田県の広さに迫る十勝平野。そこに広がる田園風景。その周囲約500キロメートルに及ぶ森林・山岳地帯。しかし直線で計ると約100キロメートルの意外に短く急峻な河川。上流地域の問題は直ちに下流地域の問題でもあります。水は汚せません。土は大切な公共財です。森は土をつくり水をつくります。これが十勝の生態系であり、その中心に帯広という都市が成立しています。この地域は確かに広く豊かですが、生態系は思いのほか脆弱です。地域の環境管理をキチッとしなければならない理由がここにあります。十勝川から鮭が昇り、日高山脈からリスが降りてくる。平成時代はそれが、この土地に住む人々のテーマになるはずです。特に、山岳地帯や平野部の開発は、従来の産業開発ではなく、市民の新しい田園生活のスタイルとなる生活開発をしていくことが基本になります。自然と共生する地域づくりは、知恵とセンスが必要となります。

都市と農村はパートナー

帯広の開発の特色は、開拓当時から日本における農業専用地域として位置付けられていたこと、さらには独自の明治期の都市設計を持っていたことです。帯広は今も昔も「都市と農村」がテーマでした。1960年代の「近代的田園都市論」、1980年代の「アグリポリス論」もそれぞれの時代を反映した都市像であり将来方向でした。農業は生命

を育てる産業であり、生命を育む環境であります。帯広・十勝にとっての地域づくりの基本がここにあります。都市と農村の共存のためには、新たな産業構造や都市構造を模索しなければなりません。生命科学産業や農村リゾートの展開、あるいは地場産品による食文化の開発などです。また、産業や学園などが複合したニュータウンの形成による都市構造の転換をはかる必要があります。

都市形成の五戦略

東北海道の拠点都市としての役割を担う地域振興プロジェクトとして第一に「都市の顔づくり」、第二に「新産業ゾーンの形成」、第三に「ポロシリ・リゾート開発」、第四に「高等教育機関の拡充」、第五に「自治体医療の充実」に取り組んでいます。なお、この五つの都市形成の戦略は、お互いに強い誘発・誘導関連にあります。産業立地は、高等教育機関の拡充により誘発されます。地域の生活を豊かにするリゾート開発は、企業人や若者など新たな人々を誘導します。また、都市の魅力と医療水準を高めることは、人々の定住を促します。このように、地域関連が強く、地域波及効果のある施策の展開がポイントになります。五戦略のうち、特に環境型プロジェクトである、「新産業ゾーン」の創出は重要です。ライフサイエンスインダストリー、バイオテクノロジー、メカトロニクスの導入など、環境負荷の小さい産業の立地が期待されます。また、新しい田園生活創出としての《ポロシリ・リゾート開発》は来世紀まで続く環境型プロジェクトです。開発の基本は、自然との共生が可能な次世代型リゾート自然公園です。例えば、馬と環境とローカルエネルギー、さらには食の基盤づくりがキーワードになりますし、ポロシリゾーンにいたる農村景観や農村再整備も一体的、連続的空間として構想しています。

国際田園都市はアジアに繋がる

この地域と農業の在り方については、すでに世界各地の人々が強い関心を持ち、この地に集まりつつあります。1995年には国際研修センターが立地します。自然と調和する環境設計、生態系を生かした地域づくりが、帯広・十勝の課題です。小都市の自立と小都市間のゆるやかな機能分担による新しい都市圈構造のつくり方を、当地では《国際田園都市》としました。「都市は農村を補完するに止まる」ことを基本とする「国際田園都市」の独自の取組みが、「都市と農村の在り方」を課題とするアジア諸国の人々に繋がると考えています。このことが辺境の地・帯広の夢です。全国の知恵ある人の参加を期待しております。

横谷 優一
YUICHI YOKOTANI
風土と建築を考える会
(株)アルコ研究所



大改造進む帯広都心部

1. 十勝・帯広市の概要

帯広市は、北海道十勝支庁20市町村の社会的、行政的中心都市である。十勝支庁は西を日高山脈、北を大雪山系、東を阿寒・白糠丘陵、南を太平洋に囲まれており、山地で林業、海岸部で漁業、平野部で農業が展開している。特に農業は、国内唯一の大規模畑作・酪農地帯であり、専業農家率は約7割、農家一戸あたり平均耕作面積は約26ヘクタールである。十勝支庁の総面積は10,829平方キロメートルで、北海道を除く都府県の総面積と比較すると、広いほうから6番目の岐阜県に匹敵する。

2. 帯広市都心部の位置づけ

帯広市は十勝平野のほぼ中心に位置し、人口は約17万人であるが、商圏人口は十勝支庁全体をカバーし、約36万人である。帯広市は隣接3町と広

域都市計画圏を形成しており、十勝支庁管内人口の67パーセントがこの圏域内に集まっている。

帯広圏では、昭和30年代後半から帯広市の西地区北側の音更町、東側の幕別町に順次宅地が整備されてきた。大型商業施設は、都心部及びその隣接地に立地してきたが、昭和50年代半ば以降、郊外住宅地周辺に小売サービス業が進出している。

同時に乗用車が加速的に普及し、商業環境も変化してきた。都心部では千台以上の収容力を持つ駐車場を2店舗が持つなど、車社会への対応が進んでいるが、特に路面小売店は消費者の大型店指向、消費形態の多様化に遅れをとり、都心部商業の衰退が深刻化している。

3. 都心部土地利用の高度化と鉄道高架事業

帯広市街地は鉄道によって、人口が増加している西南地区と、官公署、業務ビル、都心商業地を含む北東部に分断されている。駅南地区は昭和50年代後半から進められてきた土地区画整理事業に

よって、広大な更地が産みだされており、この土地の有効活用が大きな課題であった。

このようなことから、鉄道高架化による交通分断の解消、立地環境の改善による都心部土地利用の高度化は十勝・帯広圏の都市機能の高度化のために強く求められるところであった。

昭和61年から連続立体交差事業調査がはじまり、平成元年に連続立体交差事業着手、平成8年の供用開始を目指して現在事業進行中である。

4. 都市計画事業と商業近代化事業

連続立体交差事業による鉄道高架化が実現する見通しとなり、都心部における都市計画事業、商業活性化に関連する各種事業が連携を持って展開されはじめた。

帯広市では、昭和53年に「帯広都心部再開発基本計画」を策定し、昭和58年には鉄道高架を踏まえて「帯広圏総合都市交通施設整備計画調査」、「帯広駅周辺地区土地利用基本構想策定調査」を行い、昭和63年に「帯広駅周辺土地区画整理事業調査」、平成元年に「帯広都心地区地区更新基本計画」を策定している。

一方、商業関係では、昭和53年に「帯広市商業近代化基本構想」が帯広商工会議所を中心に策定され、都心部の中心的な通りである「平原通商店街整備計画」が昭和56年に策定されたのをはじめ、昭和60年代に広小路商店街、栄通商店街、電信通商店街など、都心部商店街の街路整備事業が進んできた。

5. 都心部大改造へ

帯広市はこのような経緯の中で、昭和63年に「帯広市定住拠点緊急整備計画」を策定し、「リフレッシュタウン整備計画による街路整備」、「クリエイティブタウン整備計画による街区更新」、「特定定住拠点施設整備計画による拠点整備」を一体的に進め都心部の大改造に着手することとした。

帯広商工会議所は平成2年に、昭和47年に策定

していた「帯広地域商業近代化地域計画」のローリング事業を行い、都心部の大改造に対応する「都心部商業近代化計画」を策定した。

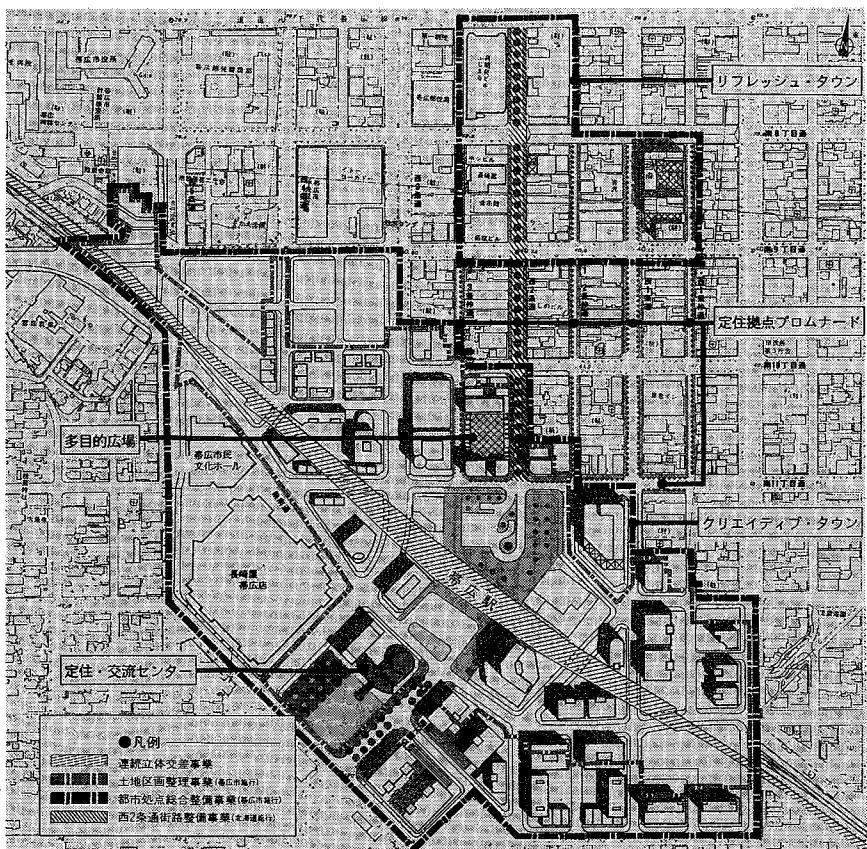
6. 帯広都心部の役割

帯広市は十勝の開拓とともに、商業流通サービスと農業関連製造加工業の集積によって発展してきたのであるが、産業社会構造の転換期に遭遇して、新しい飛躍の段階を迎えている。たまたまその時期が開拓の始めから、約百年目にあたることになった。従って、今回の都心部改造事業は十勝・帯広圏の次の百年を支える構造を造る事業になるわけである。帯広商工会議所のローリング事業からその方向を紹介すると、整備事業は次のように構成されている。第一は、都心部環境整備事業で、都市景観軸の形成を基本に都心部に歴史を刻印していく構造形成を展望している。明治時代から引き継ぐ街路構造に、雄大な大雪・日高の山並みと広大な農村風景が持つイメージを、都心部が持つべき景観コンセプトにしている。第二は都心部商業活性化事業である。これは消費者の買い物行動の大きな変化と、激しい業態変化に対応していくため、線的な商店街から、街区全体を面的に活用する商業サービス街に更新していく計画である。第三は都心部空間のシステム化として、駐車場の効率活用、歩行空間の快適性を確保する誘導街路の整備、緑地・アトリウムの確保などゆとりある都心空間の創造を目指している。

7. 新しい都市像の確立へ

地方都市の都心部は、業務サービス機能の大都市集中と、商業形態の大きな変化によって衰退が進んでいる。しかし、帯広市の都心部は地域社会全体の歴史的転換期に、次の飛躍を準備することができる大きな機会を与えられている。この機会を生かして広大な十勝・東北海道の生活・文化の発展に寄与する躍動する都市を作り上げていく仕事が我々市民に課せられている。

帯広の都心整備イメージ



大西 正和
MASAKAZU ONISHI
帯広市役所



新産業ゾーン開発：十勝の自然と調和する 未来型産業地域形成

新しい産業開発に息づく緑のまちづくり

十勝の中心都市帯広のまちづくりは、言わば自然との共生を大切なテーマとして歩みをすすめてきた歴史と言えます。開拓の歴史の開拓開墾への反省を込めて、農地を森に替える 405.6ヘクタールの「帯広の森」の造成や、公害移入型の企業誘致を廃し、緑の工場公園 426ヘクタールの産業開発などをすすめてこれたのも、まちづくりに対するポリシーと市民の熱意の成果と言えるでしょう。

帯広のまちを森と緑道と河川緑地のネットワークで覆うグリーンベルト構想により、良好な都市の環境の保全とともに、都市と農村の交流の接点としての機能の主役とされた「帯広の森」も、いま、市民のボランティアの植林に支えられ、成長をかね、育樹と管理の時期を迎えて、利活用がすすめられています。100年計画の森も18年を経てパークゴルフなど市民に楽しめる森に姿を変えつつあります。また、緑の工場公園も30年あまりを経てその名に恥じないみどり溢れる様相を観せはじめてています。

こうした水とみどりのネットワークのまちづくりの考え方を引き継ぎながら、十勝帯広の21世紀の発展を展望した新たな大規模な産業複合拠点開発により、農業関連産業を核とした新しい産業の森と生活の森づくり、「新産業ゾーン開発」が市街地に隣接する帯広市愛国町で今すすめられています。

新産業ゾーン開発とは

新産業ゾーン開発とは、自然との調和のなかで十勝帯広全体の新たな産業振興を先導する拠点づくりとしての産業開発と、豊かな自然環境のなかで十勝型田園ライフスタイルを創造する拠点づくりとしての生活開発を合わせて形成する産業複合拠点開発を行うもので、自然との共生をめざし、環境負荷の小さい開発としての意味を込めて、

「新しい産業の森、生活の森づくり」とも称しております。全体開発面積は 300ヘクタールの大規模開発で、平成 8～9年に事業着手が予定され、おおむね10年間かけて整備をすすめることにしています。

開発のゾーニング内容としては、十勝帯広の基幹産業である農業を中心とした関連産業の集積や

その高度化を図る先端技術産業や情報産業などの立地をはかる産業ゾーン、先端技術や情報の試験研究機関を集積する試験研究ゾーン、高等教育機関の整備とともに十勝圏全体での産業活動の支援や人材育成により産業の高度化を図る産業支援ゾーン、就業者や住民および広域的活用のためのハイクオリティーな利便ゾーン、田園のゆとりあふれる住居ゾーンや高いアメニティ機能と十勝らしい景観をもたらす公園・緑地ゾーンを整備するもので(別図参照)、職・住・遊・学の機能を産業の森・生活の森のなかにデザインするイメージで計画されています。

環境と共生する開発手法

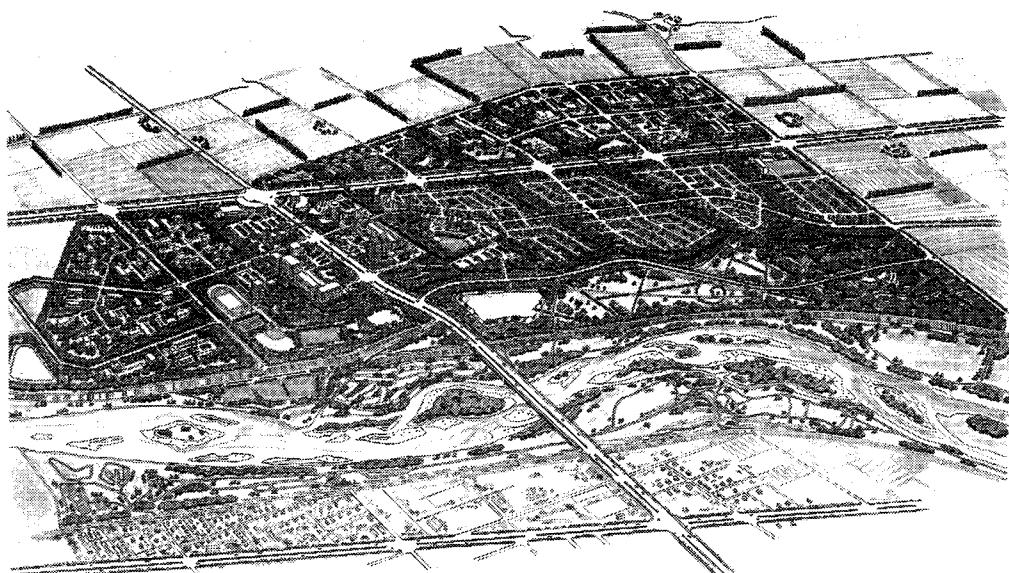
環境負荷を抑え、自然環境や地域環境と共生する開発とするため、全体のグランドデザインとして、帯広の森からのグリーンベルトとの一体性を持たせ、札内川の河川緑地と連続し増幅させる、いわば森の中の新産業ゾーン開発とし、さらにその外縁の田園景観への連続から、十勝の森への環状の森につながる構図として位置付けています。

とくに、緑化については潜在原植生の再生を通じて、札内川の河川緑化をバードサンクチュアリーなど自然保全型の整備とし、隣接するゾーンに公園や緑化を整備し、ビオトープに配慮した一定程度の自然のまとまりを形成するものです。また、この自然の森を中心に、産業ゾーンに連続する緑道と緑の「溜り」としての技術の森や住宅地や利便ゾーンへ連続するコミュニティの森に連続させ、さらに、周辺の田園の耕地防風林や小河川緑地を通じて山麓部に達する、緑と水のネットワークの形成をはかっています。

緑化デザインは、工場等を(醜いもの、汚いものを)覆う植栽から、オープンに耐え得る建物景観をともないながら、開かれ連続する緑化として本来の地位を復権するものとしています。

また、クリーンエネルギーや未利用エネルギーの活用とともに、中水道など水の循環再利用など、省エネやリサイクルへの取組により自然と人や生き物に優しい環境保全型の開発手法の検討をすすめ、産業や生活開発の拠点とともに環境創造の先駆拠点として十勝のモデル形成の役割をはたすことが、自然と共生するまちづくりをすすめた十勝の中心都市帯広市の役割とも感じているところです。

新産業ゾーン開発の構想



金清 典広
NORIHIRO KANEKIYO
高野ランドスケープ



最初に植樹祭をした場所



植林地の様な、帯広の森



アカゲラもくるようになった。



手入れの必要な林

帯広の大緑地構想

一帯広の森構想

帯広の森は、故吉村市長の発想による。吉村氏が「街づくり18年の歩み」として執筆した『風雪雨情』にその思いが語られている。

「私は20万人の人々の住む市街化区域を26キロの緑の輪で囲む計画をたてて実行に移そうとしている。元来十勝平原は、多く落葉樹の森林であった。特にカシワの樹林が昼なお暗いぐらいに茂っていた。それを拓り開いて立派な畠はできたが、平地部分に昔名残りの森林も巨木も見られなくなつた。『原始の森』の樹齢は300年前後であった。

これを再現したいのである。グリーンベルトにこれから 200年か 300年時間をかけてうそそうたるカシワの森林、ニレの林をつくろうと思う。何代か後の市民がこの巨木の下で、いこいの一時をおくれるならしあわせである。さらにこれだけではなく、白樺の林、桜の園、果樹園、子どもの遊び場、老人のための原っぱ、青年の体育場などを、幅 550メートルのグリーンベルトに散在させる。川を引き込んで変化をもたせる。魚すくいをさせてやりたい。この計画を全部市民参加のもとに造成しようと思う。各町内会、PTA、クラブ、企業者、それぞれに植樹してもらう。造園もしてもらう。そうした汗の参加がこの森づくりに愛情と情熱を持ってもらうことになるだろう。ことに週休 2 日制が目の前に来ている今日、しかも健康、体力づくりが呼ばれている今日、小学生から老人クラブまでのあらゆる人びとが、この計画を理解し、

喜んで参加してくれるだろうと期待しているのである。（昭和48年）」

街づくりは数字や理論でなく、むしろロマンや情念ではないかとする吉村氏の真骨頂ともいえるのが帯広の森である。

帯広の森は、市街化区域と市街化調整区域の間を、幅およそ 500メートル、総面積 402.5ヘクタールの森林ベルトでおおい、さらに十勝川、札内川の河川緑地と連携して市街地を囲もうというものである。

“森”は、全体の約80パーセントを森林区、残りの20パーセントを施設区として、「ふるさとの森」、「創造の森」、「スポーツの森」、「自然の学校の森」等の樹林や施設を配置する計画となっている。

これまで用地買収にあわせて、市民の植樹祭が18回催されてきている。約6000人の参加者を集めるために市民に定着してきている。

一方では、スポーツ施設区が整備され、多くの市民は、帯広の森全体を運動公園として認識している。

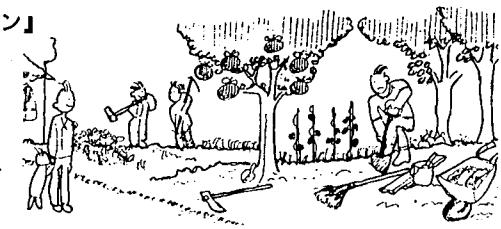
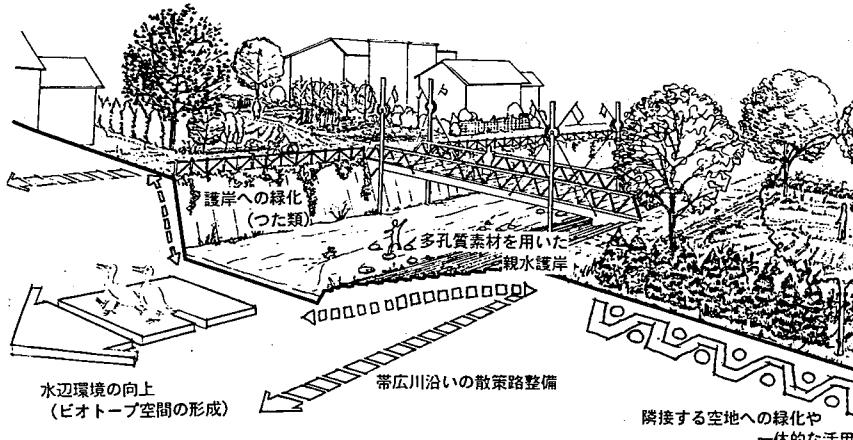
これまでに森の間伐にあたって植樹の際につけられた名札のある木を切るのにクレームが出たりしてきている。帯広の森は、市民の“森”にする意識、“環境”に対する認識を深め、今後も話題を提供しつづけていくことだろう。

森づくりは、マチづくりの戦略としての意味を超えて、次の世代に残していくものとして、帯広や十勝の象徴として、新たな展開をはじめつつある。

帯広の森基本計画図



広瀬 将人
MASAHITO HIROSE
帯広のまちとともに
育った都市プランナー
（株）計画技術研究所



「土幌線跡地、火防線 — 住民主体の景観デザイン」

1. プロジェクトの背景とねらい

本調査は、平成4年度策定された「帯広都市景観基本計画」の中で位置づけられた重点プロジェクトである土幌線跡地と火防線について、住民、市職員、専門家の参加のもと、デザインゲーム等のワークショップを重ねて、様々な知恵や意見を集約した住民主体の景観デザインである。

2. 対象地の概要

土幌線跡地は、昭和63年に廃線となった延長約2キロの旧国鉄土幌線の跡地である。幅員27mの跡地に、土手等の鉄道跡の面影や沿線住民が収穫を楽しむ菜園の景観は、住宅内の貴重な場所となっている。

一方、火防線は、帯広の歴史を刻む交差した街路形態（火除け用、消防用通路）は、他の都市に見られない特異的なものである。

3. デザインの提案

ワークショップ、デザインゲームから集約された目標やイメージ、具体的な空間デザインの提案を踏まえ、整備方針は以下のようにになった。

(1) 土幌線跡地

1) 土幌線 = 開拓の歴史が感じられるランドスケープ（土手の活用）を基本に据えて、歩きたくなる魅力的なスポットをめぐる緑道にする

2) 十勝川～都心～札内川の緑・水のつながりや回遊性をつくる

3) 十勝・帯広特有の緑や草花に包まれるとともに多様な生物相と触れ合える豊かな自然環境との共生の場とする

4) キヨスク、フローラルゲート、風車などお楽しみ装置を設置する

(2) 火防線

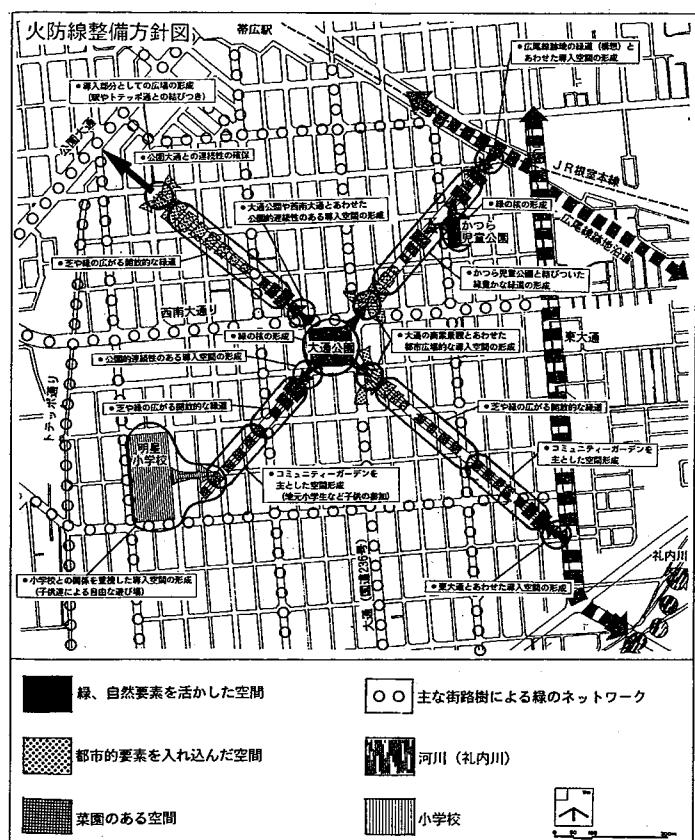
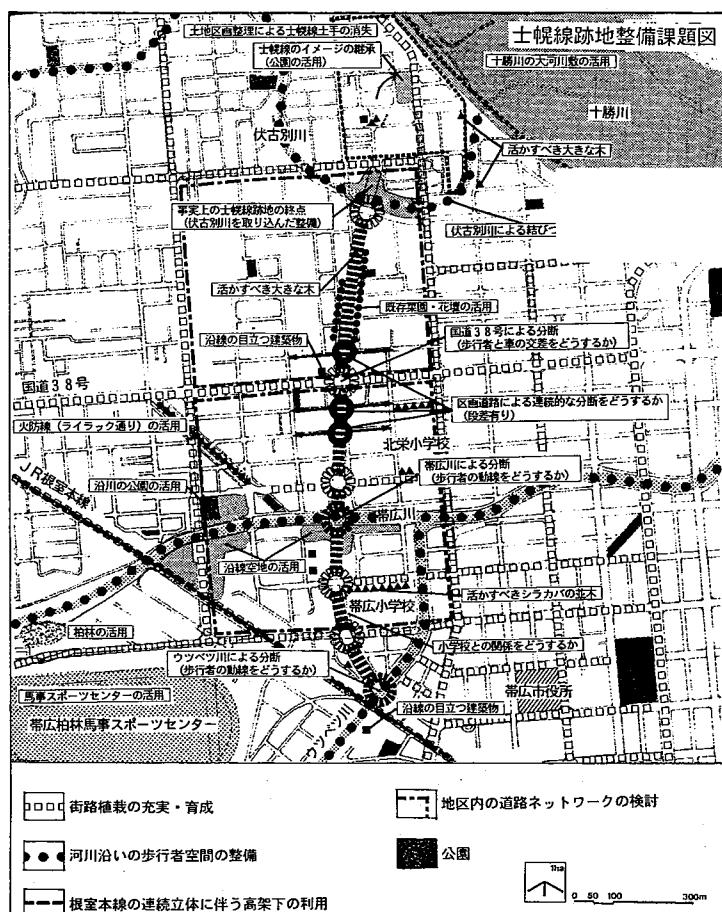
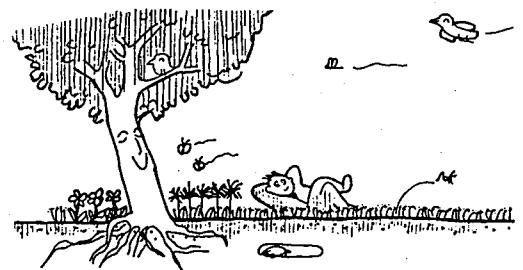
1) 周辺に点在する施設を活かした回遊性や緑の連続性をつくる

2) 各交差部分を工夫して、メリハリのある分かりやすい緑道をつくる

3) 開拓の歴史を継承した街区構成を尊重し、交差した街路形態を際立たせる

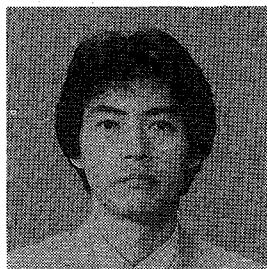
4) 多様性のある空間を創造するとともに、人や生物にとって心地よい場をつくる

5) 来訪者、生活者にとって楽しく、火防線との係わりの中から独自の景観が育まれる場とする



ブロック活動予定

山崎 洋二
YOJI YAMAZAKI
東北ブロック幹事
(株)都市創造研究所



矢島 建
KEN YAJIMA
北海道ブロック幹事
(株)プランニングワークショップ



東北ブロックより

'93プランニング塾開催のお知らせ

東北ブロックでは、仙台プランナーの会と共に、以下のように3回連続の予定でプランニング塾を開催いたします。

今年は、大学生を中心に、プランニングの意義や楽しさを知つてもらうことを目的にしていますが、関心のある方はふるって御参加下さい。御連絡をお待ちします。

JUDI 東北ブロック幹事 山崎 洋二
'93プランニング塾実行委員会

'93プランニング塾
「エンジョイ プランニング &
ウェルカム プランニング」
テーマ《新しい杜の都の都心》

●第二回 平成5年11月5日(金) 18:00~
宮城県民会館にて

第1部・シンポジウム

「実践のなかのプランニング」

…仙台都心の具体的プロジェクト関係者によるプランナーの必要性と意義についての意見交換。

第2部・ワークショップ

「公開演習…都心に夢を描く」

テーマ1 …都心複合拠点開発

テーマ2 …都心のみちづくり

テーマ3 …マチ圈ゾーニング

●第三回 平成5年12月3日(金) 18:00~

場所未定

第1部・セミナー「市民参加のまちづくり」

「実現にむけた戦略」

第2部・ワークショップ「公開演習 講評会」

…参加者のフリーな意見交換

北海道ブロック活動予定

北海道ブロックの今後の活動予定を紹介する。

8月30日(月)

柳田良造さんと幹事が話題提供者となって、最近の状況等についてディスカッションを行う。場所は札幌プラハの予定。

9月21日(火)

関西ブロックの会員を迎えて、情報交換会を行う。場所は未定である。

10月26日(火)

小樽で「歴史を生かすまちづくり」をテーマに例会を行う。小樽市役所都市デザイン課長の仲谷さんにレクチャーしていただく予定である。

都市環境デザイン会議・1993年度活動計画

月	本部 代表幹事会 (毎月第1金)	広報・出版 委員会	事業委員会	研究・研修 委員会	ブロック 月例会(北海道、関東、中部、関西)
6	- 26回	- JUDIニュース No. 12			
7	- 27回 ●総会 7/23	●ブロシャー発行 ●名簿改定版発行	●モニターメッセ 第2回 7/23		●第2回都市環境デザインフォーラム・ワークショップ(関西、兵庫県立人と自然の博物館共催)
8	- 28回	- JUDIニュース No. 13			・シンポ(北海道) ・プランニング塾(東北)
9	- 29回				・シンポ(北海道) ・シンポ(中国)
10	- 30回	- JUDIニュース No. 14			・プランニング塾(東北) ・シンポ(四国)
11	●全国加ヶ幹事会			●都市環境 デザインセミナー 第2回	●講演会(東北、都市計画 学会共催)+プランニ ング塾(東北) 11/21~23
12	- 31回			●モニターメッセ 準備会発足 ・(他の都市づくり リパブリックデザインセンターの講 師派遣)	・フォーラム(中部) ●関西ブロック総会
1	- 32回	- JUDIニュース No. 15		●JUDIギャラリー	
2	●選挙管理委員会 発足	- JUDIニュース No. 16			●シンポ「北陸における景 観施策」(北陸)
3	- 33回			●同上	
4	- 34回				
5	●役員改選 - 35回				
6	- 36回	- JUDIニュース No. 17		●都市環境 デザインセミナー 第3回	・シンポ(中国) ・中国加ヶ賞発表(中国)
7	●役員改選 - 37回				・シンポ(北海道) ・研究懇談会(九州)
8	- 38回	●JUDIニュース 合本発行 - JUDIニュース No. 18			・P.B.P.発行(関東)
9	●総会	- イヤーブック	●特別講演会 +モニターメッセ 第3回		●第3回都市環境デザイン フォーラム(関西)

事務局より

1 新会員の紹介

1993年6月1日～1993年7月31日の入会者は下記の通りです。(入会順、敬称略)
7/31現在の会員数は380名です。

氏名	勤務先
酒井 信治	(株)協和コンサルタンツ
棚町 修一	(株)ゼン環境設計
前田 裕資	(株)学芸出版社
中根 博一	(株)地域計画建築研究所
山口 繁雄	(株)地域計画建築研究所
玉田 孝二	(株)都市環境研究所
世木田茂樹	セキタデザインスタジオー3D
柴田 好敏	(株)7-L-I-S-環境計画研究所
増田 昇	大阪府立大学
伊藤 嘉明	(株)日東建材工業
中村 享一	中村享一建築設計(有)
中村 久二	(株)ゼン環境設計
鶴沼 育雄	国際航業(株)

沼達 賢一	つくば新都市開発㈱ 〒305 つくば市竹園1-1387 TEL0298-52-1111 FAX52-6138 勤務先FAX06-877-8497
久 隆浩	自宅 茨木市小柳町4-26-202 (株)G K設計 地域計画部〒171 豊島区南池袋1-11-22 山種ビル7F TEL03-3989-9511 FAX3989-0533
府川 充	(株)都市創造研究所 TEL022-224-4644
山崎 洋二	自宅 宮城県仙台市青葉区国見 6-75-5-505
山本 忠順	自宅 新宿区北新宿3-40-10 東芝ライテック(株)
吉田 博	〒140 品川区東品川4-3-1 TEL03-5479-1567 FAX5479-3595

1993年度会員名簿の掲載事項に訂正や変更がある場合は、事務局までご連絡下さい。

2 住所変更等(敬称略)

氏名	変更内容(新)
有岡 孝	Arioka Associates 〒151 渋谷区代々木5-15-10-209 TEL03-5454-1032 FAX5454-3982
大谷 英人	(株)若竹まちづくり研究所 〒780 高知市大原町87-1杉本ビル TEL0888-34-0888 FAX34-1546
小林 英夫	遊美野工房 〒150 渋谷区松涛1-1-3 松涛栄光ビル3F TEL・FAX03-5454-3621

メンバーズ・プロフィールの出版にあたって

JUDI メンバーズプロフィールの出版に向けて作業を進めていますが、会員各位の皆様には10月20日頃に会員の自己プロフィール版下作成のためのフォーマット用紙をお送りする予定ですので、よろしくご協力をお願いいたします。

メンバーズプロフィール出版委員会
担当：五十川 勝

特集の企画意図

編集後記

帯広市は人口15万人、北海道十勝の中心都市である。

地方拠点都市に指定された帯広市には、都心・市街地そして農山村部に、ユニークなプロジェクトが多数進行している。拠点都市プロジェクトでは都市環境デザインはどのような可能性を持っているか。

単に個別のプロジェクトの紹介でなく、都市の大きな戦略として、プロジェクト群をみることはできないか。この視点を、この特集では「帯広のグランド・デザイン」と名づけてみた。企画意図の第1はここにある。

企画意図の第2は、プロジェクトを支える地域の企業人と市職員のパートナーシップに焦点をあてることである。「風土と建築を考える会」は、地域の建築、土木、造園などの企業人と市職員という異なる職域の人々が集まる任意の組織である。この組織は、サロンの機能を持つではなく、メンバーが作業し、提案し、実行するまちづくり活動体の機能を持っている。中心メンバーはクリントンと同世代か、それ以下で、フットワークは軽く、タフな頭脳の面々といってよい。十勝の広々と明るい風土が、地方都市の壁を突破するエネルギーを与えているようである。

地域の企業と市との弾力的な連携プレイが、プロジェクトを支えるパワーとなっているのである。

ともあれ、今回の特集は、21世紀初頭には、全く新しい顔をみせることになる帯広都心など、10年後、20年後の未来像を垣間見ることにねらいがある。

このニュースは、緒口(いとぐち)をつくるにすぎないとしても、読者の皆様の手がかりとなれば幸いである。

編集後記

●気象観測史上、記録に残る冷夏で、しかも梅雨明け宣言もできないという93年夏となりました。九州では水害、北海道では地震災害、そして全国的な農業の作柄不調など、今年は多難の年のようにです。

●都市環境デザイン会議第3回総会は、皆様の御協力により、活発な討議を経て終えることができました。

また総会に引き続いだ開催されたモニターメッセは、多数の企業の出展と会員の参加によって今年も成功し、本会事業として軌道に乗ったように思われます。多くの会員の御尽力のおかげと感謝しています。

●都市環境デザインの事例は、編集をかけて出た土田委員長のふんぱりと会員の方々の御協力で、貴重な情報の蓄積となりそうです。皆様からの積極的な御提案を期待しています。

●本号の特集は、十勝平野の中心、帯広市の北隣、音更町の象設計集団のゲストハウスで発想しました。

さいわい、「風土と建築を考える会(通称、風建考)」の方々が中心となって協力して下さいました。心から感謝の意を表します。

●夏休みの季節にかこつけるわけではありませんが、発行が1ヶ月づれこみ申し訳ありませんでした。
(林 泰義)

広報・出版委員会

小林郁雄 林 泰義
沢木俊岡 宮前保子
近田玲子 森 延彦
土田 旭

事例

歩行者空間

小樽出抜小路デザイン

所在地 北海道小樽市色内1丁目、2丁目

発注者 小樽市

計画設計体制 (株)プランニングワークショップ 矢島 健

「歴史を生かすまちづくり研究会」（座長：飯田勝幸北大助教授、委員18名、うち地区内居住・営業者5名）に調査・計画過程の内容を諮り、地元に密着した住民主体の意見・意向を反映した計画推進の体制をとった。

整備期間 調査・計画は平成4年度に行い、整備期間は約10年間を予定。

整備費 整備費道路（小樽市道出抜小路線）、広場およびヴェストポケットパーク等の基盤施設の整備費は約14億2千万円、沿道の建物等の修復・改修・建替等に係る工事費約55億円（試算）。出抜小路；幅員約3.6m（1間）、延長約720m。石垣風舗装、ロードヒーティング、キャブシステム、ガス灯風照明、その他歴史的景観の形成。

施設概要 ベストポケットパーク；数カ所、計590m²。石垣風舗装、ガス灯風照明、「歴史を生かす街並み整備拠点地区」として位置づけられ、周辺の位置



ス灯風照明、ボラード、植栽、その他ファニチャーによる歴史的景観の形成。

広場；面積約2,300m²。石垣風舗装、ガス灯、案内サイン、ボラード、その他歴史的景観の形成。

参考資料

「歴史的資源の現状と活用方法等に関する調査報告書（北海道総合文化開発機構）」

整備前



整備後（モンタージュ）



事例

道路景観

松本城周辺まちづくり・宮渕新橋上金井線改良事業

所在地 長野県松本市丸の内地内

発注者 松本市

計画設計体制 都市景観形成基本計画；(株)計画技術研究所 松本城周辺まちづくり検討委員会；委員長：吉田俊弥（信州大学名誉教授）特別委員；新谷洋二（日本大学教授）、委員；岡村勝司（信州大学教授）、小沢一郎（建設省）、安原啓示（文化庁）等他6名 事務局 松本市都市開発部 基本・実施設計；(株)都市づくりパブリックデザインセンター、(株)GK設計 樹勢回復協力；東邦レオ(株)

整備期間 都市計画決定；昭和36年／事業認可；昭和60年 基本設計・松本城周辺まちづくり検討委員会；平成2年度／詳細設計；平成4年度／工事期間；平成2年度～平成4年度

整備費 宮渕新橋上金井線改良事業費；約640,000千円（内訳 松本神社樹勢回復；約26,000千円、道路改良・外堀改修・二の丸木橋架設他 約424,000千円、深志橋架設；約190,000千円）

松本城復元鳥瞰図



…計画道路

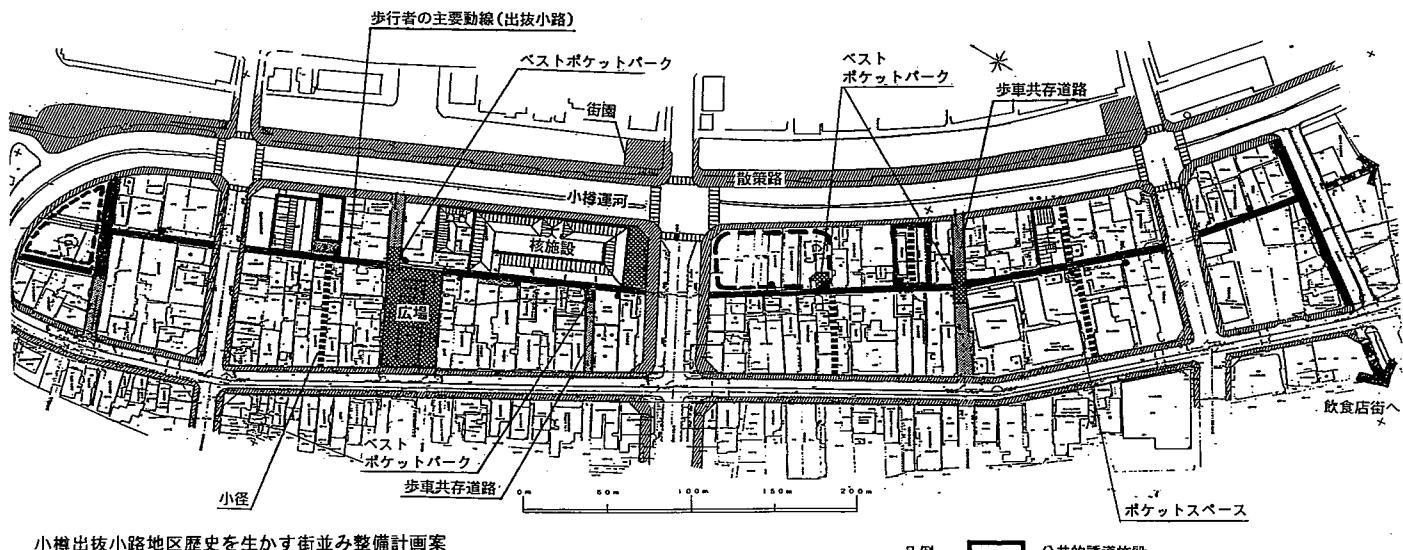


小樽出抜小路デザイン

【解説】小樽出抜小路は小樽市の中心市街地にあって、その周辺には小樽運河があり、ウォーターフロントに近接した古くからの生活と産業の道路である。北海道の戦略プロジェクトの一つ「歴史を生かすまちづくり」の一環で、幅員が約3.6mの出抜小路を軸とする延長およそ720mのエリアが、平成2年度に「歴史を生かす街並み整備拠点地区」として北海道の指定を受けるにいたり、小樽市においては3年度から整備計画に着手している。小樽市は道内では函館市に次いで歴史的資源の豊富なまちであり、中でも小樽運河の周辺に集中して分布していることから、歴史的景観を生かした街並み整備を出抜小路地区で展開しようとしている。

小樽運河に面していた石造倉庫群の裏通りにあたる幅2間の出抜小路は、その主な素材である「軟石」の壁が歴史的な建築景観の基調をなし、凧瓦の壁と相俟って、通り全体の景観的雰囲気基調を作り出している。

出抜小路に面している専用戸建住宅が11戸あり、また通りを挟んで行き来しながら営業している工場等があつて、小路の急激な歩行者専用化は難しく、また非住宅用途への土地利用の純化は好ましい形ではない。したがって居住と職場（生産、営業）および観光とが共存した土地利用と小路など基盤整備のあり方が課題であり、現在住民の参加を得て整備へ向けての検討が進められている。【矢島 健】



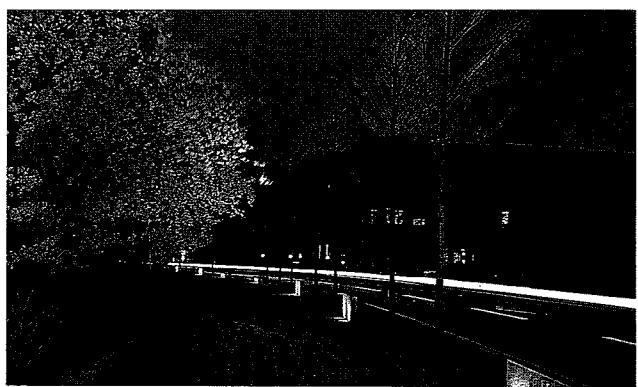
小樽出抜小路地区歴史を生かす街並み整備計画案

凡例 公共的誘導施設

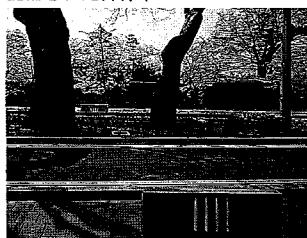
施設概要 道路延長；約780m 幅員；16m／車道舗装；約7,020m²／歩道舗装；約5,070m²／深志橋橋長；約22.65m 松本神社御神木保存；杭打、桁架設 21m・樹勢回復工事 歩道舗装；白御影石・かわらタイル／照明A26基；白御影石・埋め込み照明／ベンチ4基；白御影石・埋め込み照明／植栽；カツラ・植樹；白御影石51基 深志橋；合成床板低床桁／桁カバー；灰色御影石／高欄；白御影石／埋め込み照明8箇所／ゲート信号柱

松本城周辺まちづくり・宮渕新橋上金井線改良事業

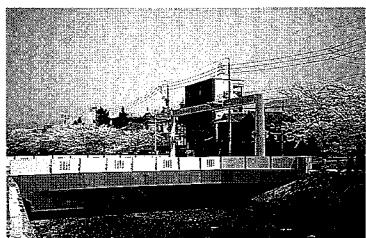
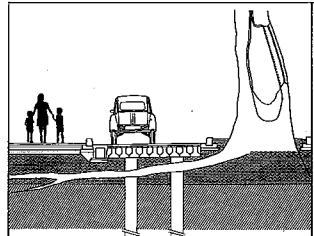
【解説】国宝松本城外堀に沿う宮渕新橋上金井線の景観整備。従来の一方通行を相互通行に改め、幅員を7mから16mへ拡幅した。この街路は保存地区と市街地のバッファーゾーンと位置づけ、歴史性を継承し、素朴な空間を志向した。具体的には、松本神社の大木を象徴化すると共に、周辺の景観を考慮し、松本城への展望を活かすため電柱類を移設、工作物類も低く抑えた。舗道舗装は烏城と呼ばれる松本城の外観を踏まえ、2色のモノトーン構成とした。照明は松本城の土格子を記号化した意匠とし、松本城のライトアップを損なわない配慮から埋め込み器具による間接照明とした。また史跡松本城総堀に架かる深志橋も道路と統一感をつくるデザインとした。1993年6月、全国街路事業促進協議会より、第5回全国街路事業コンクール建設大臣賞を受賞した。【西沢 健】



整備された御神木



御神木保存概略図 橋桁設置により、
道路の荷重、振動から根を守る



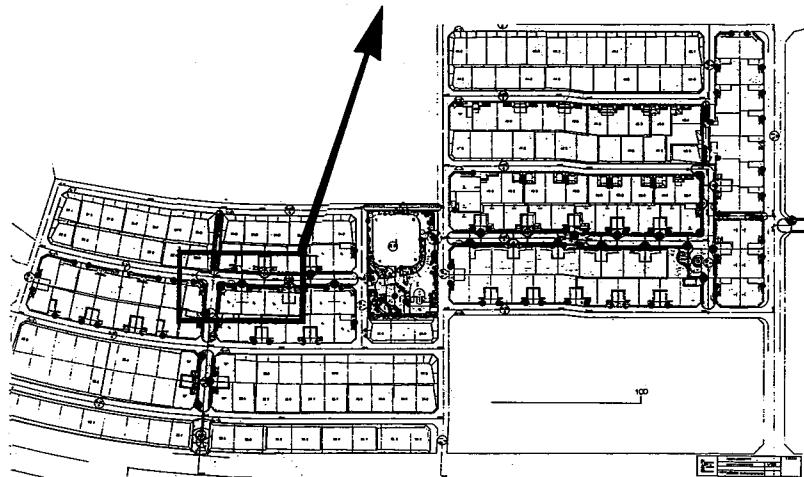
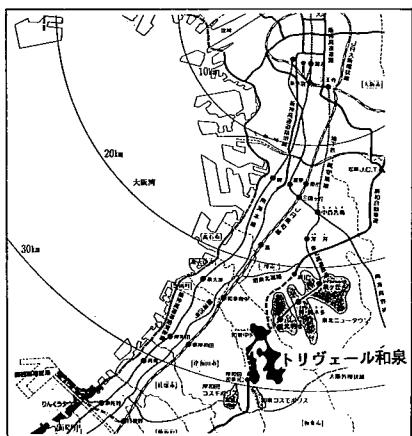
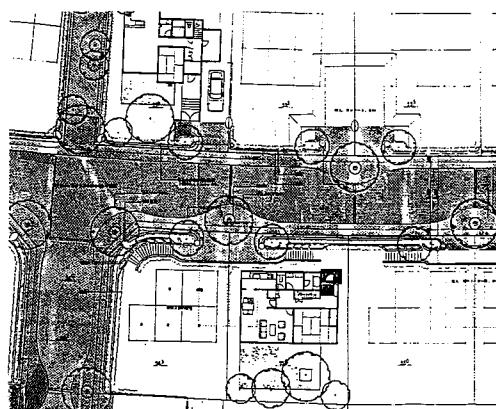
事例

歩行者空間

トリヴェール和泉街びらきゾーン街なみ外構

所在地 大阪府泉市いぶき野
発注者 住宅・都市整備公団関西支社和泉開発事務所
計画設計体制 計画・実施設計；現代計画研究所大阪
整備期間 1989年～1992年
施設概要 ボンエルフ道路（巾員8m）約450m、街なみ外構90画地

【解説】古代からの歴史と文化の息づく地にふさわしい、新たな歴史の舞台づくりを目指して、この街のデザインテーマは、「時を刻む—歴史をひきつぎ歴史をつくる」と設定。街並みの構成は、土器のイメージからおおらかな曲線をデザインモチーフとし、肌にやさしい素材、形、ディテールを採用。特に、土ものとして、1枚1枚に時の流れを秘めた国産の古レンガを再利用し、現代技術によるコンクリートPC開発部材との組み合わせにより、テーマの実現を図った。【江川直樹】



事例

歩行者空間

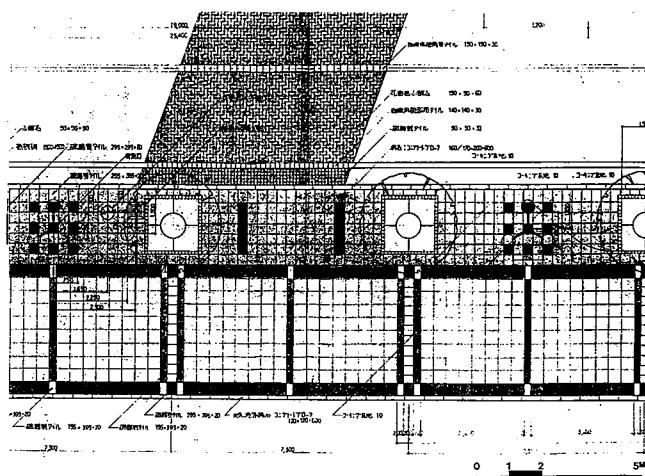
千葉銀座商店街

千葉銀座商店街（振）ふれあい商店街近代化事業施設整備工事

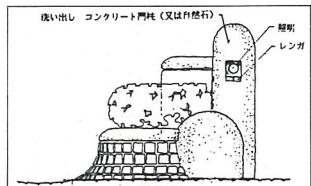
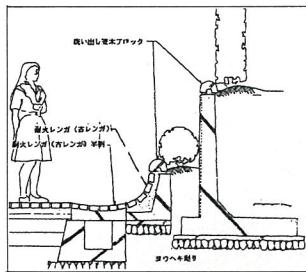
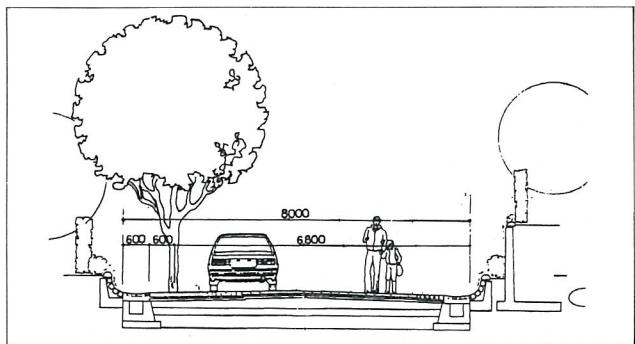
所在地 千葉県千葉市中央1、2、3、4丁目
発注者 千葉銀座商店街振興組合
計画設計体制 高橋志保彦建築設計事務所
施工者 大林組
整備期間 1988年12～1990年3月
整備費 7億2,145万円
施設概要 道路延長／770m（細街路を含む）、車道幅員／6.5～7.5m、歩道幅員2.3～6.5m、路面舗装／歩道舗装・陶磁質タイル、車道舗装・花崗岩小舗石、植栽／クスノキ14本・ユリノキ29本、街具／吸盤入付屑入13基、スツール39基、車止め59基、ゲート4基、街路灯64基、アーチ改修、電話ボックス5基、

ガス灯4基 景観整備；ファサード改善、シェード設置、モニュメント設置（6基）

【解説】千葉県の「ふれあい商店街近代化事業」指定の環境整備。政令指定都市にふさわしい明るく現代的な中心街に変容しようとアーケードを撤去しシンプルで豊かな質感のある舗装材によるパターンと色彩をデザインした。アーケード撤去のコンセンサスを得るために大変苦労したが、商店街の若いリーダー達とともに根気強い説得が実を結んだ。県、市、警察と度重なる会議を持ったが、商店街、市に街づくりに対する情熱を持った人がいたため成功した。【高橋志保彦】



トリヴェール和泉街びらきゾーン街なみ外構



事例

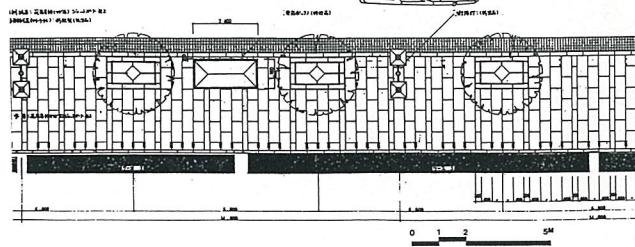
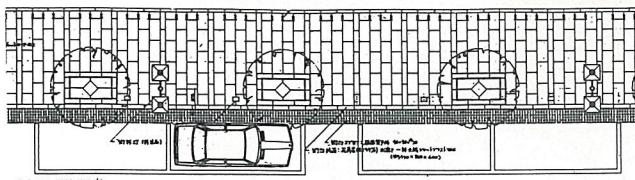
歩行者空間

銀座西並木通り



銀座西並木通り商店振興会環境整備事業

所在地 東京都中央区銀座5～8丁目
発注者 銀座西並木通り商店振興会
計画設計体制 高橋志保彦建築設計事務所+日建設計
施工者 竹中土木・鹿島建設共同企業体、清水・大成道路建設共同企業体
整備期間 1985年12月～1993年4月
整備費 約8億円
施設概要 通りの延長／約566m 路面幅員／3.75m 車道幅員／7.05m 対象面積／約7,860m² 歩道の舗装材／茶御影石（ブラジル産カバオボニート）、街路樹／リンデン（128本）、街路灯／60基、電話ボックス／4台（2連式）



【解説】老舗の並ぶ銀座西並木通りの環境整備。設計にあたり、地元商店街より、シックで深みのあるデザインを求められた。年月を経るほどに表情を豊かにするであろう自然石を舗装材に選び、ブラジル産の茶御影を採用した。陰気な植込みを取り除くとともに、中央区、築地警察、警視庁と協議して幅員を25cm拡げ、開放的で明るい歩道とした。リンデンの並木に香りの出る電話ボックスを置き、モダンなデザインの街路灯は町の長老に否定されガス灯のイメージの街路灯とした。【高橋志保彦】